

# 春が来れば

2006(平成18)年3月6日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)

★★★★



監督・脚本＝リュ・ジャンハ／出演＝チェ・ミンシク／キム・ホジョン／チャン・シニョン／キム・ガンウ／ユン・ヨジョン／イ・ジェウン／キム・ドンヨン／チャン・ヒョンソン  
(ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2004年韓国映画／128分)

……作品は少ないものの、韓国映画の1つの重要なジャンルを占めるのが『八月のクリスマス』(98年)、『春の日は過ぎゆく』(01年)などの静かで心温まる作品。その物語のメインとなるのは当然男女の恋愛模様だが、この映画はそこに私の大好きな『スウィングガールズ』(04年)張りの(?)音楽の要素がいっぱい。たとえ音楽大会で優勝できなくても、男と女、先生と生徒、そしてまた男と女を結びつけていく、主人公が作曲したトランペットの小作品があればいい……? やっぱり俺には、音楽をメインとした感動作が1番……。中年オヤジになりつつあるチェ・ミンシクの、ダサイくせにカッコいい姿にも惚れ惚れ……。

## リュ・ジャンハ監督 VS ホ・ジノ監督

この『春が来れば』の監督は、本作で長編映画デビューしたリュ・ジャンハ監督だが、彼はホ・ジノ監督の『八月のクリスマス』(98年)、『春の日は過ぎゆく』(01年)で助監督をつとめたうえ、『春の日は過ぎゆく』では脚本づくりにも参加していた人物。したがって、男女間の恋愛模様というテーマはもちろん、その演出やカメラワーク等に「お師匠さん」であるホ・ジノ監督の影響を受けていることは明らか。そのうえ、音楽をホ・ジノ監督と同期の盟友であるチョ・ソンウが担当しているから、映画全体の雰囲気は『八月のクリスマス』『春の日は過ぎゆく』とそっくり。とりわけ『春の日は過ぎゆく』と共通するのは4月＝桜だが、『春の日は過ぎゆく』の桜は「別れの桜」であったのに対し、『春が来れば』の桜は……?

## 主人公はすべてに中途半端な中年男……？

チェ・ミンシクは1962年生まれだから今年44歳だが、彼がこの映画で演ずる主人公であるトランペッターのイ・ヒヨヌは、中年男というだけでその年齢は不詳……。このヒヨヌとピアノ教室をやっている恋人のヨニ（キム・ホジョン）との仲は一進一退をくり返し中途半端なまま(?)ずっと続いていたが、ヨニはいよいよヒヨヌを諦めて別の男と結婚しようかと真剣に悩んでいる様子。またヒヨヌはカンウォン道サムチョク市のトゲ中学校の音楽教師として雇ってもらえたのだから、ヒヨヌの映画上の年齢設定は、役者の実年齢よりは少し若い30代後半……？

彼の夢は交響楽団でトランペットを吹くことだったが、今やそれが叶わないことは明らか。しかしそうかといって、音楽を商売道具としてうまくお金を稼いでいる友人のギョンス（チャン・ヒョンソン）のように、うまくトランペット吹きを技術を活用することもできず、また市民講座で音楽を教えている、音楽を心から愛していないチャラチャラしたおばさん相手の仕事にイライラ……。

そんなヒヨヌだから、ヨニとの恋愛・結婚問題の処理が中途半端なことはもちろん、母親（ユン・ヨジョン）との同居生活のあり方も中途半端で、お互いにイライラ……。こんなすべてに中途半端な中年男の主人公イ・ヒヨヌの役を、『オールド・ボーイ』（03年）、『親切なクムジャさん』（05年）でものすごい役を演じたチェ・ミンシクが熱演！

## ヨニはさかんにヒヨヌに秋波を送っているが……？

音楽教室を経営しているヨニは、ホントはヒヨヌからの求愛を待っているのだが、経済力・生活力に自信のないヒヨヌは、到底それを言い出すことができない状態。逆にヨニから「私、新しくつき合っている人がいるの」とか「結婚しようかしら」と言われると、「いいじゃない」「幸せに」と心にもないことを言ってしまう始末。パンフレットの中には、金智羽の「これこそが『韓国独身男性』の真実の姿だ！」という面白い解説があり、これは必読。それはともかく、ケイタイでのヨニの話ぶりを聞いていたり、特に伝えたい用事があるわけでもないのにヒヨヌの元を訪れ、ヒヨヌに向かって直接話しかける言葉の端々を聞いてみると、

これは、ヒヨヌに対して「早く清水の舞台から飛び降りる覚悟で……」とプロポーズを促していることは、観客の目には明らか……？ それなのに、さっきのようにつれない返事はないだろうと思うのだが……？

しかし、そう言われてしまうとヨニは消極的選択ではあっても、ヒヨヌと別れ、新しい恋人との結婚という方向に進まざるをえないことに。その結果、これから寒い冬を迎えようとしている中、ヒヨヌは友人のギョンスから、ヨニの結婚が来年の春になるらしいとの情報を聞くことに……。しかしこれでは、ヨニがさかんにヒヨヌとの距離感を測りながら秋波を送った甲斐がなかったことになるのでは……？

## ソウル、サムチョクそしてトゲ

韓国で有名な都市は、何といてもソウルと釜山。首都ソウルは高層ビルが建ち並ぶ内陸部の大都市だが、釜山は都会でありながら同時に海に面したひなびたまちという雰囲気も……。この映画の舞台となったトゲ中学校があるトゲは、ソウルの東方約160kmにある炭鉱のまちだったが、石炭産業が斜陽化するにつれ、最盛期には4万人を超えた人口が今は1万6000人に減っているとのこと。このトゲからさらに北東約20kmにあるのが、その東側を日本海に面したサムチョク市。このサムチョク市一帯は、テレビドラマ『秋の童話』『冬のソナタ』、映画『四月の雪』（05年）、『春の日は過ぎゆく』などの撮影が行われた、実に雰囲気のあるところらしい。この映画でも、海岸沿いにあるちょっとしゃれたレストランがヒヨヌのデート（？）の舞台に使われる他、砂浜はさまざまなストーリー展開の重要な舞台要素になっている。

『チルソクの夏』（03年）は、釜山と下関を結ぶ日韓の高校生の恋愛物語だったが、そこでも海が大きなウエイトを占めていた。松山市という、すぐ近くに海があるまちで育った私も、海が大好き。『春が来れば』というタイトルの意味を理解するためには、桜が第1のポイントだが、サブとして海と海岸そして砂浜も大きな役割を……。

## 「学歴詐称」もこの映画では……？

ヒヨヌが音楽教師として赴任したトゲ中学校の吹奏楽部は、かつて全国大会で

入賞したこともあったが、今は地方の衰退＝町の人口の減少に伴って、部員も減りギリ貧状態……。ヒヨヌを部員に紹介した先生などは、露骨に吹奏楽部への反感を示していたほど。また所詮どうでもいいと思っているためか、彼はヒヨヌを「ソウル大学卒」と紹介したため、生徒たちの注目はその一点に。そうなると、その場で明確に否定できないのが人間の性……。したがって、ヒヨヌは学歴詐称の訂正をしないままその後、吹奏楽部の指導にあたることに……。日本以上に学歴やその詐称にうるさい韓国社会では、「こりゃちょっとヤバイのでは」と思っていると、ラスト近くになっていいタイミングで……。

## 耳に残る美しいトランペットの旋律

ソウル大学を卒業していなくても、ヒヨヌのトランペットの腕は一流。ただちょっと、性格が偏っているため(?)交響楽団にも入れず、音楽教室の仕事でもうまくいかないだけ……。そんな屈折した性格のヒヨヌはなかなか生徒たちの前では、自分の腕前を披露しなかったが、本番直前の練習ではついに生徒たちにお手本を……。

そんなヒヨヌには自分が作曲したトランペットの名曲(?)があった。この映画の中では、ヒヨヌの作曲したこの小作品がストーリー構成上、大きな鍵を握っているうえ、観客の涙を誘う小道具にもなっている。したがって、耳に残る(はずの)美しいトランペットの旋律をゆめゆめ聞き逃すことのないように……。

## 田舎の中学校もいいもの……?

夏目漱石の『坊っちゃん』は、東京から松山に赴任してきた新米教師が、地方都市の中で織りなすさまざまな物語を面白く紹介した小説だが、この『春が来れば』でも、ソウルからトゲ中学校に赴任してきたヒヨヌの周りには、坊っちゃんが、「山嵐」「赤シャツ」「野だいこ」「うらなり」「マドンナ」などとあだ名をつけたようなさまざまな人物、そして出来の悪い(と最初思った)吹奏楽部の生徒たちがいた。

まず、ヒヨヌにとってのマドンナはスヨン(チャン・シニョン)。彼女は薬局を1人で切り盛りしながら、長期入院中の父親の面倒を見ている優しい性格の娘。

したがって、彼女は、ヨニとの恋愛に失敗した(?) ヒヨヌの心を、折にふれて安らかにする役割を……。ただし、「オレの彼女に手を出すな」とばかりに、そこに入ってきたのが自動車修理工のジュホ(キム・ガンウ)。彼との間にちょっとしたトラブルが発生するが、それも後から振り返れば、地方都市への赴任中に起きた楽しい思い出のひとつ……。

## 2人の生徒との交流は……?

最初は吹奏楽部の生徒たちに音楽を教えることに格別興味も熱意もなかったヒヨヌだったが、地元で生活し、地元の人たちとふれ合い、そして生徒たちとの交流が深まるにつれて、次第に本気モードに……。交流の第1は、ケニー・Gに憧れて、いいカッコをしたいという望みだけでサクスを吹こうとしているヨンソク(キム・ドンヨン)。音楽への心構えを説いたり(?)、彼女とのトラブルの処理(?)をしてやったりしているうちにいつしか……?

交流の第2は、おばあさんと2人暮らしをしているトランペット担当のジェイル(イ・ジェウン)。ある日突然、ジェイルが出てこなくなったのは、おばあさんが雪で転んで足を骨折したため。そんな事情を知ったヒヨヌはその手術代を稼ぐため、ナイトクラブで派手な衣装を着て、酔客相手にトランペット演奏のサービスまでも……。こんな「禁じ手」を使ってまでヒヨヌが一生懸命になるのは、一体なぜ……?

## 「過ぎゆく者」と「来る者」……?

『春の日は過ぎゆく』とこの『春が来れば』は、似たようなタイトルの似たようなテーマの映画だが、実は根本的に「過ぎゆく者」と「来る者」という違いがある。今日3月8日は、もう分厚いコートは不要と思えるような陽気で、日本でもいよいよこれからは桜が開花する季節。4月から新たな生活に臨む人たちがたくさんいるはずだが、そこではやはりこの映画のタイトルどおり、『春が来れば』=「待ち人来る」といきたいものだが……?

2006(平成18)年3月9日記